

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

平成22年10月26日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 農学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 鶴 井 香 織

助成の種類	平成22年度 国際研究集会発表助成	
研究集会名	(和文)第13回国際行動生態学会 (英文) 13th International Behavioral Ecology Congress	
発表題目	(和文)オスのみに起こる斑紋消失:ハラヒシバッタにおけるオス間ハラズメント回避戦術 (英文) Male-limited absence of body markings as an anti-harassment tactics in a polymorphic pygmy grasshopper <i>Tetrix japonica</i>	
開催場所	オーストラリア 西オーストラリア州 パース市 Perth Convention Centre	
渡航期間	平成22年9月26日 ~ 平成22年10月1日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有(プログラムのコピー)	
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円
	使用した助成金額	200,000 円
	返納すべき助成金額	0 円
	助成金の使途内訳	参加登録料 550AUD 約44145.75円
		航空料(往復) 89,630円
	宿泊費 1泊164AUD × 6泊 = 984AUD (1AUD=80.265円 2010.10.26現在) 約78980.76円	
	宿泊費のうち、12756.51円は自己負担	

## 成果の概要 / 鶴井 香織

### 概 要

報告者は、京都大学教育研究進行財団の平成22年度国際研究集会派遣助成 II 期採択者として2010年9月26～10月1日にかけてオーストラリア・パースで開催された第13回国際行動生態学会に参加し、ハラヒシバツタの隠蔽色が種内の視覚コミュニケーションに与える影響について口頭にて発表した。

### 学会に参加して

国際行動生態学会には参加国数27ヶ国以上で、アメリカ・EU諸国だけでなく、インド・アルゼンチン・南アフリカ共和国等、全ての大陸から研究者が集まり、参加者総数は1000名前後である。行動生態学の分野ではもっとも大規模な国際研究集会である。発表内容も、様々な動植物に関する行動生態学だけでなく理論的な内容を扱う数理生態学にまで及ぶ。

今回の集会は私の専門である隠蔽色の研究が盛んなヨーロッパからの参加者が多く、セッションを聴くだけでなく、ランチタイムや懇親会などの時間に多くの研究者と交流することができた。特に、隠蔽色研究の第一人者 Jhon Endler 博士及び若手有力者の Sami Merilaita 博士に自分の研究を紹介したところ興味をもって貰えたことは大きな収穫だったと思っている。後日、論文の別刷りを是非送ってほしいという依頼に応え、メールにて別刷りを送付した。

また、行動生態学会では、開催地に近い国立公園などに赴き、その生態系に触れるというイベントが毎回企画されている。今回はオーストラリアであったため、夜間に有袋類の生態を観察するというツアーに参加した。私は専門が昆虫であり、哺乳類のフィールドワークを経験するのは初めてであったが、観察には哺乳類には見えない赤色灯を用いることなど、興味深い新たな経験が数多くあった。ツアー前の明るい時間に偶然親しくなり、一緒に珍しい鳥を追って駆け回った女性研究者が、行動生理学の研究で著名な Ann Hedrick 博士であったことをツアー最後の名刺交換の折に知り驚いたこともよい思い出である。

9月下旬のオーストラリアはちょうど早春にあたり、残念ながら昆虫を目にする機会は少なかった。しかし、日本ではペットとして飼育されている様々なインコ類が街路樹に営巣したり、求愛している様子を間近に観察できたことはとても良い経験となった。インコ類は、成鳥になった後も親元に残り弟妹の世話をするという「ヘルパー行動」の研究が盛んに行われている鳥である。日本にはヘルパー行動をする鳥を目にするのは稀なため、今回初めてヘルパー行動を目の当たりにし、新たなインスピレーションを得ることができた。このように、国際研究集会のために海外に赴くことは、海外の研究者と交流できるだけでなく、未経験の生態系を目の当たりにし、新たなインスピレーションを得られることにもつながる点で、貴重かつ不可欠な活動であると改めて実感した。

### 研究発表

報告者は、10月1日午前の Visual Communication のセッションにて15分間の口頭発表を行い、鳥類捕食者との相互作用により進化したバツタの隠蔽色(黒い斑紋パターン)が、種内の視覚的配偶者認識に利用されていることを発見したという研究成果を発表した。質疑応答の時間には、

3名の方から鋭い質問及び有用な助言をいただいた。時間内には全ての質問に対応することができなかったため、セッション後個別に議論を行った。ベルリン大学でバツタ類の分類についての研究を行っている Gerlind U. C. Lehmann 博士からは日本のバツタのサンプルを是非送ってほしいとの依頼を受けた。

### 今後活かすこと

日本における研究発表は、淡々と成果を説明するものが多い。しかし、海外の研究者の発表には、オーディエンスを引き込むための様々な工夫がなされていた。まず、視覚に訴える動画・画像を有効に利用することで理解を促す努力が多くみられた。また、的確な、時にはユーモラスな比喻により、一見難解そうに感じられる理論を分りやすく説明するテクニックは非常に参考となった。